

新技術に対する不信の解消の構造

——「農と食」と「医療」の領域におけるゲノム編集技術の比較を通して——

国際基督教大学 山口富子

1 目的

近年、国内外でゲノム編集技術の実用化の為の準備が活発化している。特に、CRISPR/Cas9の発見により「生命とは何か」という生命科学の根源にある問いの答えの糸口が見つかったとし、研究者コミュニティは湧く。ゲノム編集技術は、ヒトや微生物、植物、動物、昆虫に至るまで、あらゆる生物のゲノムの改変を可能にする技術であり、社会に計り知れない恩恵をもたらすことが予想される。他方、早いスピードで進められる研究開発や広範囲かつ急激な変化に対し、違和感や不安を指摘する人もいる。しかしこうした不安は、何もゲノム編集技術に限った事ではなく、過去にもクローン技術、遺伝子組換え技術などに対して社会不安が生じている。その意味で、ゲノム編集技術に対する不信の解消という問題は古くて新しいものである。こうした状況を踏まえ、本課題は、バイオテクノロジーに対する違和感、不安、不信がどのように解消されようとしてきた（いる）のか、不信の解消の構造、また信頼を得るための行為という二つの視座から検討する。本報告では、本課題の分析の枠組みと予備的な分析結果を紹介する。

2 分析の枠組み

二つの回路の比較：「農と食」と「医療」の領域におけるバイオテクノロジーの応用研究は、いずれも人の生活や生命に深く関わり合いを持つという点で共通点を持つものの、社会への応用の過程は異なる回路で進められる。その為、そのプロセスにおける信頼また不信の解消の作動の仕方が異なることが想定される。そこでこの二つの回路の比較を通してそれぞれの分野の特徴を明らかにしつつ、先述の問題を検討する。

応用期に観察される現象：一般市民が先端科学技術についての意見を形成するのは、基礎研究が応用の段階に移り、マスメディアの報道が主要な論点を提示することによる（Shineha 2016）。また、応用期には産業界への技術移転の方策についての政策議論、審議会による規制の枠組みの検討などもおこなわれ、この時、先端科学技術の社会的諸課題の骨格が提示され、はじめて不信の解消が政策的課題として浮上する。すなわち、先端科学技術の応用期に着目することにより、先端科学技術への不信の解消が個別の文脈でどのように試みられてきた（いる）のかをより克明に観察できる。

一般化された他者：応用への移行期には、国民、患者団体、消費者団体、産業界など、その科学技術研究と利害があると開発側が想定する人、すなわち「一般化された他者」が認識され、開発主体によるさまざまな社会行為が観られる。特に、大型の公的な資金が原資となる科学技術研究プログラムや、人の生命や生活に直接的にかかわるテーマの研究プログラムの場合、行為者が考える「意味」において、想定される他者との合意や諒解を志向する語りが先鋭化することが想定され、信頼確保のための社会行為の観察が可能になる。

過去の事象への反省的意味付け：生命科学研究への期待や不安は、過去の経験と独立した形で起こるものではなく、過去の経験に対して反省的な眼差しを向けた上で形成される（Brown and Michael 2003）。つまり、遺伝子組換え技術、iPS細胞、異種移植など、生命科学領域の多種多様な研究開発とその実用化をめぐる過去の経験が（Suzuki 2014, Yamaguchi 2013）、象徴的に現在進行中のゲノム編集技術の研究開発に対する違和感に投影されるということが考えられる。